

与えられた
分担研究内容

自治体におけるQOL評価の指標等

分担研究者: 安達潤 (北海道大学大学院教育学研究院)

研究協力者: 山北崇由 (株式会社 ネットアーツ)

QOLの評価について

- 本研究においてQOLを評価することの意味
 - QOL低下を防ぐための、あるいは低下したQOLを向上・維持するための評価
 - QOL低下が生活のどの側面で生じているかを把握する必要性。
 - QOLの向上・維持のための具体的な手がかりを把握する必要性。
- 知的障害・発達障害のQOL評価の課題
 - 多くのQOL尺度は主観的評価で、QOLを左右する要因は把握できない。
 - 多くのQOL評価項目は、知的障害・発達障害当事者には抽象度が高い。
- R6継続申請ヒアリング後の評定者のコメント
 - QOLへ注目している点が評価できる。
 - この領域のQOL測定の困難さという学術的背景を踏まえる必要がある。
 - 何がQOLを下げているか、向上させるかの具体的な要因の記載がなく残念。

本研究と関連する先行研究

- Taylorら(2023) 「自分の強みがわかっていることと幸福感」:自分の強みを実際に使うことが、ASDの人たちの生活の質や幸福感、メンタルヘルスを予測する。
 - ✓ ASDの人たちが i)自身の強みを知っていること、ii)自身の強みを使うことがより良い結果につながっているかどうかを調査する。(138ASD vs 138non-ASD)
 - ✓ ASD群と非ASD群は自らの強みについて同様の報告をした。
 - ✓ ASD群は非ASD群よりも、強みについて知らず、強みを使ったことも少なかった
 - ✓ そして、強みをより使っていたASD群の方が、あまり使っていないASD群よりも、QOL、幸福感、メンタルヘルスの状態が良好であった。
 - ✓ 強みをより使えるようにすること、自閉症特有の能力よりも、より一般的な強みを使えるようにすることが、今後の、支援には求められる。

本研究の基本的な考え方

- 発達障害の人たちの「特性・診断」(だけ)ではなく、「生活の事実」を起点に、生活全体を網羅する環境調整支援の展開を目指す。
 - ✓ 個々の強みを把握し、生活の中で使えるようにすること。(Taylorら(2023)からの繋がり)
 - ✓ 個々に必要な合理的配慮を把握し、その提供を生活の中に広げていくこと。
 - ✓ 個々がより快適でいられる環境を把握し、その提供を生活の中に広げていくこと。
- 当事者による主観的QOL評価だけでなく、その当事者の生活が快適で過ごしやすく安心感のあるものかどうかを「生活の事実」に即して把握。
- 生活上の困難さが多くある状況で、合理的配慮の提供が乏しく、強みを活用する機会もなければ、生活の快適さは低下し、QOLも低下する。
- 「生活」を網羅的に評価するために、ICF(国際生活機能分類)を活用。
- ICFシステム(安達,2023)の評価視点のQOL評価への活用
 - ✓ 活動と参加:生活上の困難さが軽減される場面や支援はあるか?
 - ✓ 環境因子 :生活機能を阻害する環境因子、促進する環境因子は?

ICF項目を援用したQOL評価（評価項目例①）

活動と参加

ICFシステム（6-16y）の活動と参加項目を内容でまとめて25項目に再構成

#質問票1#

【活動と参加】の観点によるQOL（生活の質）の評価

ここ3ヶ月間くらいのお子さんの生活を振り返って、質問票#1~3は各項目について①、②、③、④のいずれかに丸を入れてください。質問票#4は各項目について「A」「B」それぞれ、①、②のいずれかに丸を入れてください。「注」に該当する場合は、「注」の指示に応じて回答してください。

項目番号	活動と参加の内容	①特に支援はないが困難なく 独力でできており苦勞はない	②困難が軽減する場面や支援の 提供によりあまり苦勞していない	③困難が多少軽減する場面や 支援はあるが苦勞している	④困難が軽減する場面や支援の 提供なくかなり苦勞している
1	日用品を使う、日課や簡単な作業を行う				
2	食べることや飲むこと				
3	入浴、トイレ、清潔を保つこと				

活動と参加全体への質問

以下は、パート1の回答全体についての質問です

「困難なく独力でできており苦勞はない」(①)にチェックした項目は、その児の「強み」です。研究協力児はこの「強み」を生活の中で、全体としてどの程度使えていますか？ 右の当てはまる□にチェックして下さい。

□十分に使えている □多少は使えている □あまり使えていない □ほとんど使えていない

「困難が軽減する場面や支援であまり苦勞していない」(②)にチェックした項目の「場面や支援」は研究協力児に必要な合理的配慮となります。それらの合理的配慮（場面や支援）が児の生活に提供されている程度は全体としてどれくらいですか？ 右の当てはまる□にチェックして下さい。

□提供は十分にある □提供は多少ある □提供はあまりない □提供はほとんどない

ICF項目を援用したQOL評価（評価項目例①）

人の環境因子

ICFシステム（6-16y）の環境因子項目（人）から5項目を選定

#質問票2#

【環境因子(周囲の人たち)】の観点によるQOL（生活の質）の評価		これらの人たちとの関わりには			
項目番号	環境因子（周囲の人たち）の内容	①心地よさや安心感がある	②心地よさや安心感が少しある	③緊張や不安感が少しある	④緊張や不安感がある
1	家族との関わり				
2	親戚との関わり				

人の環境因子全体への質問

以下は、パート2-aの回答全体についての質問です

Aに該当する「心地よさや安心を感じる人たち」と関わる機会はどの程度、ありますか？



ほとんどない

あまりない

ある

十分にある

Bに該当する「緊張や不安を感じる人たち」との関わりを回避できる機会はどの程度ありますか？



ほとんどない

あまりない

ある

十分にある

ICF項目を援用したQOL評価（評価項目例②）

人以外の環境因子

ICFシステム（6-16y）の環境因子項目（人以外）を内容でまとめて5項目に再構成

#質問票3#

【環境因子(製品と用具)】の観点によるQOL（生活の質）の評価		これらの物は			
項目番号	環境因子（製品と用具）の内容	①生活のしやすさ、快適さ、 活力をもたらしている	②生活のしやすさ、快適さ、 活力を少しもたらしている	③生活のしづらさ、不快さ、 活力低下を少しもたらしている	④生活のしづらさ、不快さ、 活力低下をもたらしている
1	食べ物や飲み物、医薬品（該当する場合）				
2	日々の生活で使う製品や用具				

人以外の環境因子全体への質問

以下は、パート2-bの回答全体についての質問です					
Aに該当する「生活しやすさ、快適さや活力をもたらす」製品や用具を使う機会はどの程度ありますか？	⇒	<input type="checkbox"/> ほとんどない	<input type="checkbox"/> あまりない	<input type="checkbox"/> ある	<input type="checkbox"/> 十分にある
Bに該当する「生活しづらさ、不快さや活力低下をもたらす」製品や用具の使用を回避できる機会はどの程度ありますか？	⇒	<input type="checkbox"/> ほとんどない	<input type="checkbox"/> あまりない	<input type="checkbox"/> ある	<input type="checkbox"/> 十分にある

ICF項目を援用したQOL評価（評価項目例②）

感覚に関わる環境因子

ICFシステム（6-16y）の環境因子項目（感覚）を内容でまとめて5項目に再構成

質問票 4

【環境因子（感覚刺激）】の観点によるQOL（生活の質）の評価		A. 好みのタイプの刺激がある場合		B. 苦手なタイプの刺激がある場合	
項目番号	環境因子（感覚刺激）の内容 注：「刺激の影響がない」場合は「生活への影響はない」にチェック（☑）をして「A」の回答のみ検討してください。	①好みのタイプの刺激があり適宜の活用で快適な生活となっている	②好みのタイプの刺激があるが特に活用されず生活の快適さは少ない	①苦手なタイプの刺激があるが配慮があり生活の不快さは少ない	②苦手なタイプの刺激があるが配慮がなく不快な生活となっている
1	光 <input type="checkbox"/> 生活への影響はない				
2	音 <input type="checkbox"/> 生活への影響はない				

感覚に関わる環境因子全体への質問

以下は、パート2-cの回答全体についての質問です

A①とB②に該当する「QOLが高くなる環境因子」が生活の中で提供されている機会はどの程度ありますか？ ⇒ ほとんどない あまりない ある 十分にある

A②とB①に該当する「QOLが低くなる環境因子」を生活の中で回避できる機会は機会はどの程度ありますか？ ⇒ ほとんどない あまりない ある 十分にある

研究計画の概略

- 全国の5～10の放課後等デイサービス事業所を対象に、ICFシステムを用いた発達支援を1年～1年半の期間、実施。
- ICFシステムによる発達支援の前後でQOLに関わる評価尺度を実施。
- 実施する評価尺度
 - 質問票①:ICFの観点によるQOL維持状況の評価
(オリジナル, 親と事業所による評価)
 - 質問票②:KINDL小中学生版
(対象児のQOL) (親評価, 本人評価)
 - 質問票③SDQ日本語版
(対象児のメンタルヘルス・社会性)
(4-17歳;親と事業所による評価)
 - 質問票④子どもの発達支援家族アンケート
(家族のQOLと支援・調和状況)
(オリジナル:親の自己評価)

項目の
一部

1. 子どもとのかかわりについて

Q1) 子どもを支援する方法が具体的にイメージできる。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

Q2) 子どもの気持ちを考えてかかわることができている。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

Q3) 気持ちに余裕がなくて、一方的に子どもを叱ってしまうことがある。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

結果分析の方向性と今後

- 事例数が少ないため、発達支援に係るデータを中心とした質的分析。
 - 実際に行われた発達支援の内容から、尺度の評価結果Pre-Postを考察する。
- 発達支援Pre-Postでの各尺度による評価結果の比較検討
 - ICFシステムによる発達支援はQOL維持状況の改善に有用か？
 - ✓ KINDL, SDQ, 発達支援の家族アンケートの評価データの検討と併せて。
 - ✓ ICFシステムによる発達支援の詳細データによる考察も検討。
 - ICFシステムで把握された「強み」や「困難軽減場面・支援」の提供状況
 - QOLの維持・向上につながる環境要因（場面や支援・環境因子）の考察と当該の環境要因の提供状況、加えて、QOLを阻害する環境要因の除去状況
- より大規模な調査を予定
 - 質問票①（家族、支援者）、質問票②（本人、家族、支援者）をNを増やして実施

本研究が目指すこと

- 発達障害の人たちの「特性・診断」(だけ)ではなく、「生活の事実」を起点に、生活全体を網羅する環境調整支援の展開を目指す。
- 「特性・診断」を起点とするトップダウン支援と「生活の事実」を起点とする「ボトムアップ支援」が、地域支援においてバランスよく配置され、支援を必要とする人たちのQOL向上を共通目標とする地域支援体制が構築されること。
- その「ボトムアップ支援」のツールとしてICFシステムの活用を考える。



- 本研究班の3年間の中で、支援を要する子どもたちが有する「強み」が生活の中で活かされ、必要な「合理的配慮」が生活の中で十分に提供されることがQOLの向上につながっていくこと、つまり、QOL向上のための評価指標は「強みの活用と合理的配慮の提供」であることを示唆できれば、と思います。